

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520595

研究課題名（和文）戦後沖縄の米兵向けバーに関する研究—女性従業員の生活史を中心に—

研究課題名（英文）Research on the “A sign Bars” in Postwar Okinawa : Life histories of some barmaids

研究代表者

小野沢あかね (ONozAWA AKANE)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00276700

研究成果の概要（和文）：

本研究はオーラル・ヒストリーの手法を重視し、戦後沖縄のコザ市における次の3つの問題を、特に②を中心に明らかにした。①復帰以前の沖縄における米兵向けバーの経営実態とその歴史的变化、②米兵向けバーで働いた数人の女性従業員の「労働」、賃金、借金、「労働」意識、自己認識、ひいてはそのライフ・ヒストリー、③コザ市におけるバー以外の商店の営業実態と、それらの商店と米兵向けバー・ホステスとの関係、である。

研究成果の概要（英文）：

This research examined the following 3 issues on the A sign bars in postwar Okinawa, by using the oral materials. Firstly, the actual conditions of the “A sign bars” and their historical changes, secondly, life histories of some A sign bars’ barmaids, and finally, connections between A sign bars and other various shops in Koza city.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近現代史

## 1. 研究開始当初の背景

私はこれまで、主として近代日本の公娼制度政策とこれに対する反対運動を、地域民衆史と国際関係史の視点から明らかにしてきた（その成果は拙著『近代日本社会と公娼制度—民衆史と国際関係史の視点から—』吉川弘文館、2010年を参照のこと）。この研究では、近代の地域社会において、売買春を含む

遊興とこれを国家公認していた公娼制度が民衆生活にどのような影響をひきおこしていたか、人々はそのことに対していかなる認識を持ち、公娼制度批判を展開したのかという問題を明らかにすることが課題の1つであった。こうした研究を進めるなかで、身売りや売買春の実態について、できるだけその当事者たちの「労働」や意識そのものに内在

して分析を行なう仕事を、次なる課題として志すようになった。

以上の動機に基づき、1998年頃から、戦後沖縄における米兵向けバーとそこでのホステスの女性たちの生活史に関する聞き取り・研究を開始した。

軍隊や基地がもたらす買春問題についての研究は、性暴力という視点から、最近関心が高まっている新しい研究分野である（たとえば、藤目ゆき『性の歴史学』不二出版、1997年、奥田暁子ほか『占領と性』インパクト出版、2007年、宋連玉ほか編著『軍隊と性暴力—20世紀の朝鮮半島—』現代史料出版、2010年など）。沖縄については、高里鈴代『沖縄の女たち』（明石書店、1996年）などが、ホステスの女性たちへの米兵の暴力や、その精神的トラウマについて明らかにしており、また、米兵を相手とした売買春が最も行なわれていたベトナム戦争時にはいくつかのレポートも書かれている。さらに近年では、沖縄を含む東アジアに駐屯した米軍の性対策に関して、米軍資料を使用して明らかにした研究も登場した（林博史「アメリカ軍の性対策の歴史」『女性・戦争・人権』7号、2005年3月など）。

これらの研究は重要なものだが、しかし、売買春を含む米兵向け水商売におけるホステスの「労働」、そこでの賃金、借金などの歴史的变化を、当事者の「労働」意識、自己認識も含めて当事者の側から内面的に明らかにし、それを沖縄女性史の中に位置付けようとした本格的な研究はほとんどない。こうした現状をふまえ、本研究は下記の目的・方法の下、研究をすすめた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の通りである。

(1) 戦後沖縄におけるAサインバー（米軍が米兵の立ち入りを許可したバーをこう呼ぶ。AはApproved for the U. S. forcesのA）に対する米軍・琉球警察の政策と、それらのバーの経営の歴史の変遷を、特にコザ市（現沖縄市）を事例として、女性従業員の「労働」、賃金、借金、売春の歴史の変遷を中心に明らかにすることである。こうした問題は史料が残りづらいため、元バー経営者、関連する諸営業者、元警察官などへの聞き取りを重視する。

(2) 元ホステスの女性とその家族・友人・雇い主などからの聞き取りを通じて、ホステスの女性たちの「労働」実態、「労働」意識、暮らしと自己認識、さらにはライフ・ヒストリーを、オーラル・ヒストリーの手法で明らかにすることである。そしてそのことを通じて、戦後の米兵向けバーでのホステスの経験がどのような経験であったのか、沖縄女性史

の流れの中に位置付けることである。

(3) 基地に深く依存したコザ市の都市社会経済史の中に、上記のバーとホステスの「労働」・暮らしを歴史的に位置付けることである。具体的には、コザ市におけるバー以外の米兵向け商売の店舗所有者（レストラン、洋裁店、美容院、刺繍店、化粧品店などの諸営業）などについて聞き取り調査を行ない、それらの営業実態がバーやホステスとどのように関係して利益があげられていたのかを考察する。また、それらの商売人はバーやホステスをどのように見ていたのか、彼らはホステスにどのように対応していたのかも考察する。

さらに、婦人会などの社会団体の構成員からも聞き取りを行ない、バーやホステスの存在が、地元住民にどのように見られ、どのように処遇されていたのかも考察する。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究方法としてはオーラル・ヒストリーを重視し、ホステスをはじめとするAサインバーに関係した人々のライフ・ヒストリーを丹念に明らかにすることを重視するという点で特徴的である。売買春を含む水商売に携った女性たちは、一見自主的に就業しているようにみえる場合も、実際には暴力団、親や恋人・夫などによって強制的に、あるいは愛情関係の利用によって就業させられ、借金を負わされているケースも多いこと、その「仕事」を通じて、深い精神的トラウマや自己否定のメンタリティを負うケースの多いことが、婦人相談員などによって指摘されている（たとえば、兼松佐知子『閉じられた履歴書—新宿・性を売る女たちの30年—』朝日新聞社、1987年）。すなわち、この種の仕事に参入していく経路や、「労働」実態・「労働」意識・自己認識に固有の特徴を浮き彫りにするには、狭い意味での「労働」だけでなく、その女性をとりまく様々な社会的諸関係を含むライフ・ヒストリーを考察していくことが求められているのである。

ところが、こうした売春を含む「労働」・「労働」意識・賃金・借金・暮らしやその自己認識、ひいてはライフ・ヒストリーについてはほとんど文献史料が残らないため、オーラル・ヒストリーの方法が求められる。しかし一方で、こうした「労働」に携る人々は、多くの場合、その体験をめったに語りたがらないため、聞き取りは、独自の困難性を背負っている。

以上をふまえて私は、関係者との長年わたる交流の中で、信頼関係を築くことを心がけた。こちらからはあえて質問をせず、関係者たちとの世間話や雑談を繰返す中で、お互いの気心を知り、彼らの日頃の暮らしやもの

の考え方に触れ、彼らの話したい話を丹念に聞く事につとめた（この点について詳しくは、拙稿『「世間話」から歴史学へ』『史苑』68(1)、立教大学史学会、2007年11月、1-6頁を参照のこと）。こうした努力を続ける中で、彼らのライフ・ヒストリーや自己認識、ひいては家族の歴史を詳細に明らかにし、さらに彼らが決して話さないこと、話した内容が大きく揺れ動く点なども含めて、聞き取り内容を考察する方法をとっている。

#### 4. 研究成果

(1) コザ市における米兵向け飲み屋・バーの歴史の変遷を、女性従業員の労働・賃金などを中心に明らかにした。

戦後の沖縄では、米軍基地の建設にともない、米軍人軍属を顧客とした第三次産業が発展し、特に嘉手納基地に隣接したコザ市では、米兵向けのバーが多数建設された。1950年代の米兵向けバーでは、バーに付属する女給部屋に住み込みの女性従業員が客を取って収入をあげ、そのうち6割程度がバーの経営者、残りが女性の取り分になるケースが多く、女性たちは経営者から「前借金」と呼ばれる借金をしていた。しかし、女性従業員の労働実態は、Aサイン制度新基準の制定（1963年）とベトナム戦争景気の下で、大きく変化を遂げ、新基準制定後のAサインバーの一部では、女性従業員（ホステス）は、「住み込み」でなく「通勤」となり、同時に、女性の収入は米兵相手の売春による代価を業者と分割したもののみならず、店から時給計算で賃金も支給されるようになった。

1960年代半ば以降のAサインバーでは「チケット制」といい、米兵にドリンクをおごってもらった量に比例する賃金支払方法も登場した。つまりこの時期のAサインバーの一部では、売春以外の収入の道も登場しており、あからさまな管理売春は影をひそめるようになっていったが、ホステスがホテルなどで米兵相手に行なう売春からバーの経営者も利益をあげており、文字通りの自由売春ではなかった。また、1960年代のAサインバーにおいても依然多くの女性が「前借金」を抱えており、売春によってこれを返済していた。こうした知見は、この科研費支給以前においてもある程度得られていたが、科研費支給後、より多くの関係者への聞き取りによってさらに信憑性を強化することができた。

また、元Aサインバー経営者やその近隣の商店主たちとの持続的な交流と「世間話」により、彼らが自らの商売と人生についてどのような自己認識を持っているのかにも接近できた。

(2) 数人のAサインバーの元ホステスの女性たち本人と、その家族、親友などからの聞

き取りにより、彼女等の「労働」、「労働」意識、自己認識、ライフ・ヒストリーを明らかにした。

①2000年に知り合った元ホステスのAさんとの交流を深め、長期間にわたる聞き取りを行なった。Aさんは本島北部の出身で、その母親は若いころ本土へ出稼ぎにゆき、沖縄戦終結後に夫と離婚、コザで米兵向けバーに勤め、やがて自身がバーを持つようになった。小学生の頃、コザで働く母のもとへやってきたAさんは、その暮らしのなかで、「沖縄にはだめになる」と思い、高校卒業後、自力で本土の大学へ進学し、妹を養うために本土で水商売をしながら大学へ通った。しかし、母が賭け事で多額の借金をつくったことを見かねたAさんは東京オリンピック後、沖縄へ帰り、1968年からコザ市でAサインバーのホステスを始めた。

ベトナム戦争時のAサインバーでの仕事は、当初「自慢話」として語られた。米兵に対する接客に工夫を重ね、チケット制度の下で儲けた。しかし、儲けの多い彼女の「ひも」になろうとする男たちにつかまらないよう、借金で束縛されないように注意することは努力を要することであった。沖縄の日本への復帰は、彼女の仕事にとって必ずしも良い影響を与えず、バーでの仕事は儲からなくなった。その後具志川市（現うるま市）に自ら米兵向けのバーを持ち、90年代にいたるまで、その店を続けた。

彼女の話はその母親はじめ、母方の家族代々の話にも及び、家族の中における長男の位置と権力、本土との関係、自身のホステスとしての労働や人生についての自己認識・自己評価、結婚や子育て、男女交際に対する考え方、同様にホステスだったが、若くして亡くなったいとこの女性のライフ・ヒストリーにまで及んだ。Aさんのライフ・ヒストリーとその関係者の話は、一人の女性の体験にとどまらない、近現代沖縄における家族史を女性の側から語ったものとなった。アメリカ人と結婚して渡米したAさんの妹からも、その帰郷中に聞き取りを行ない、現在はAさんの娘、孫等からも聞き取りを行なっている。今後もそれら関係者への聞き取りを継続し、Aさんの故郷に現在も住む、叔父夫婦などにも今後聞き取りを行なっていく予定である。

②元ホステスのBさんは奄美大島から1950年代に沖縄本島へやってきた。米兵向けの飲み屋の女給を経て、あるAサインバーのホステスとなり、長年にわたり同じ店に勤めた。Bさんは病気となり、2009年に亡くなってしまったが、その姉親子（とくにBさんの姪）と、Bさんの親友からBさんの人柄、仕事内容、店主家族や同僚との関係、恋人関係、そ

のライフ・ヒストリーを詳細に聞く事ができ、今後も聞き取りを継続する予定である。

Bさんは、奄美大島で恵まれない少女時代を過ごし、結婚をしたが、その結婚から逃れるようにして沖縄本島へ出てきた。店の同僚ホステス数人とときわめて強い絆で結ばれており、店の主人の家族（とくに主人の妻）とも仲がよかつたらしい。彼女の所有していた多数の写真・手紙からも、そうした状況が浮かび上がる。

Bさんの姉の話は、Bさんだけでなく、Bさんの両親や兄弟の話にも及んだ。また、Bさんの姉のBさんに対する対応などから、ホステスという仕事が家族の中でどのように受け止められていたのかも垣間見られる。また、Bさんが姉家族を金銭的に支えていた事もうかがいしれた。さらに、Bさんの姉親子、Bさんの親友からは、Bさんと強い絆のあった同僚の元ホステスCさんやその他のホステスのライフ・ヒストリーと家族史も知ることができた。

(3) コザ市における商業で、店舗数・従業員数（とりわけ女性従業員数）が最も多く、税収もダントツに多いのが、Aサインバーをはじめとするバーや飲み屋であった。その他の主だった商売としては、一般的な日用雑貨販売、レストラン、洋裁店（テーラー）、美容室、理髪店、化粧品店、質屋、刺繍店などがあげられる。そして、それらの店の多くが米兵のみならずホステスを重要な顧客としており、Aサインバーに深く依存していたと言える。そこで、沖縄市役所の市史編集担当の方々と協力して、それぞれの店の営業実態について聞き取りを行ない、こうした商売が米軍や米兵向けバーの存在にどのように依存し、ホステスたちをどのように見ていたかなどについて、彼らがその営業上間近で知りえた、ホステスたちの暮らしや仕事についても聞き取りを行なった。ここでは、洋裁店、美容院、洗濯屋などをあげる。また、婦人会などの社会集団、区長、特別警邏隊元隊員などに対する聞き取り調査も行なった。こうした聞き取りからも、コザ市におけるAサインバーやホステスの比重の大きさ、ホステスに対する人々の差別感と親近感の双方がうかがえた。

#### ①洋裁店（テーラー）

6店ほどの洋裁店と元従業員の人々への聞き取り調査を行なった。ベトナム戦争時代を中心に、コザ市では洋裁店が非常に繁昌した。顧客は、米兵とホステスが中心であった。米兵は自分自身のスーツ、もしくは故郷の妻や恋人へのプレゼント、ホステスへのプレゼントとして洋服を購入した。また、ホステスたちも洋裁店で自分自身の洋服を多数購入し

ていた。洋裁店の多くは女性によって切り盛りされた零細なものであり、女性たちは他の洋裁店での見習いを経て、あるいは文化服装学院などでの勉学の後、開業している。繁忙期には洋裁のできる近所の女性たちに下請に出した。生地は那覇や本土から仕入れ、米兵の持って来るファッション雑誌などを参考にしてみよう見真似でつくったが、飛ぶように売れた。基地の中で米兵の妻子のために服をつくることもあった。洋裁店を切り盛りした女性たちにはホステスの知り合いも多かったため、ホステスについて知識を得ることもできた。また、大きい洋裁店には、香港からきている職人やインド人の職人が働いていることも多く、彼らは男性であった。そうしたインド人と共同経営する沖縄の人もあった。

#### ②美容院

ホステスを顧客としていたコザ市の美容院は、洋裁店同様、米兵向けバーとそこで働くホステスたちに支えられて発展した。1950年代から営業を続けてきた美容院の女主人への聞き取り調査を継続的に行なっている。本島北部出身のその女性は、高校卒業後に美容師の資格をとり、本土へも研修に行ったことがある。別の美容室の見習いを経て、開業した。1960年代の最盛期には、Aサインバーのホステスたちは、一日に2回も美容院で髪をセットしにくることもあった。それぞれのホステスはいきつけの美容室が決まっているので、ホステスの知り合いも多く、その暮らしや人間関係、仕事の内容にも詳しい。現在でも昔からの客が来店してくる。

#### ③洗濯屋

売春街で働く女性たちの洗濯を請け負っていた女性から聞き取りをした。1週間に一度、洗濯物を受け取り、出来上がったものを引き渡す。金は彼女たちの雇主から支払われる。

#### ④婦人会会長

コザ市やその周辺部での婦人会関係者への聞き取りを行なったが、こうした聞き取りにおいても米兵向けバーやホステス関係の聞き取りを得ることができた。ある婦人会長の話によれば、バー周辺に住む女性たちのなかには、米兵向けバーで働いている女性の子どもを預かって育て上げる人もいた。子どもを産んだが、夜の商売のために育てられないため、お金を貰ってかわりに彼女の子どもを育て上げるのである。このようなケースはわりと頻繁にみられたようであり、こうした話からも、ホステスの仕事の片鱗とその暮らしぶりがうかがわれた。

(4) 研究成果の国内外における位置付けと

## インパクト

本研究は今後も継続し、やがて本にまとめる予定であるが、国内外において以下のようなインパクトを与えるものと考えている。

第一に、本研究のように、売買春の実態を、経営、女性の「労働」・賃金・借金・「労働」意識・自己認識などの点で、当事者の側から内在的に究明しようとした仕事はきわめて少ないため、国内外へ少なくないインパクトを及ぼすと考えられる。

第二に、戦後沖縄女性史研究に対してインパクトを与えると考えられる。戦後の沖縄では、A サインバーで働いて生活をなしたててきた女性が非常に多かった。したがってその人々のライフ・ヒストリーや家族の歴史を明らかにすることで、戦後の沖縄女性にとって水商売とは何であったのかを究明することになると考える。

第三に、本研究は、コザ市という基地に深く依存しているという点で特徴的な都市の都市社会史研究としての意義もあり、都市社会史研究へも一定のインパクトを及ぼすものと考えている。

第四に、本研究はオーラル・ヒストリー研究の新たな可能性や方法を切り拓くだけでなく、歴史学そのものの方法にも新地平を切り開く可能性をもつものと考えている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 小野沢あかね「女性史から『男性史』への問い—『男性史』全3巻によせて—」『歴史学研究』844、2008年9月、51-57頁、査読無。

[図書] (計2件)

① 藤原千沙・山田和代編著・小野沢あかね『労働再審 第3巻 女性と労働』大月書店、2011年、205～234頁、総頁数284頁。

② 小野沢あかね『近代日本社会と公娼制度—民衆史と国際関係史の視点から—』吉川弘文館、2010年、総頁数318頁。

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

小野沢 あかね (ONOZAWA AKANE)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00276700

(2) 研究分担者  
なし

(3) 連携研究者  
なし